

シリーズ 第99回 人権



語り合ってみれば、人と人

津市の人口全体に占める外国人の割合は約3%だそうです。これは実に津市内の約30人に1人が日本国外にルーツを持つということであり、小学校のクラスで換算すれば、1クラスに1人以上の外国籍の児童がいるということになります。

昨年から今年にかけて、私は仕事の関係で市内の小学校を訪れる機会があったのですが、私が子どものころと比べると、今の小学校の様子からは随分とグローバルな印象を受けました。校舎内を歩くと、掲示物には日本語の表記とともにいくつもの言語が併記され、外国籍と思われる名前の友だちを呼ぶ児童の声が何度も耳に入りました。

このほか学校に限らず、普段の生活の中でもコンビニや飲食店の店員さんが外国人というのは、今どき珍しくありません。

しかし、こうした国際化が進む一方で、外国人に対する差別や偏見も目立ちます。インターネット上でも、特定の民族や国籍の人々を誹謗中傷するような書き込みを見かけることが度々あり悲しい気持ちになります。そういった差別の根幹にあるのは、言語、文化、生活習慣などの違いから生じる相手に対する無理解ではないかと思います。

以前携帯ショップの相談窓口で、外国人の店員さんと向かい合ったとき、私は「本当に詳しいの?」「きちんと対応してくれるの?」と思ってしまいました。しかし、実際に相談を進めていくと、その店員さんは当然のことながら携帯電話についてとても熟知しており、流ちょうな日本語で親切に対応してくれました。

うな日本語で親切に対応してくれました。

普段、差別を不快に感じていたにも関わらず、私がこのときに抱いた感情も、恥ずかしながら一つの差別であったと思います。その日初めて会った相手で、その人のことをよく知らないのに、ひとくくりに外国人はこういうものだ^{あつた}と決めつけて、その先入観だけで相手を判断してしまったのです。

「腹を割って語り合ってみれば、結局は人と人だった」——これは、渋沢栄一を主人公に幕末から昭和初期までを描いたNHK大河ドラマ『青天を衝け』で、私がとても印象に残ったセリフです。それは、日ごろ私が抱いていた差別に対する気持ちを、まさに言い当ててくれるような言葉でした。

ドラマの主要人物の一人である尾高惇忠は、幕末の動乱の折には外国人の排除を訴え過激な活動を行っていましたが、明治維新後、富岡製糸場の立ち上げに携わり、のちに初代所長に就任します。

そんな彼が外国人技術者たちとの交流を経て語った言葉が、先ほどのセリフです。書物による知識だけで外国人を憎んでいた彼でしたが、直接交流を重ねてみれば、自分たちと外国人は理解し合える同じ「人と人」だったというのです。

先入観で相手を判断するのではなく、実際に触れ合うことで、初めてその人の人となりを知ることができます。相手を知ることが、無知・無理解からくる不条理な差別や偏見をなくすことの第一歩です。そうやって人と向き合うことが、国際的な社会を築いていくためには重要なのではないのでしょうか。

(30代 男性)